



Title	江戸後期から明治初期の絞り染め：江戸の浮世絵、 京の古裂
Author(s)	上田, 香
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 74-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

江戸後期から明治初期の絞り染め

— 江戸の浮世絵、京の古裂 —

上田 香 嵐峨美術大学

はじめに

絞り染めは、世界各地で自然発生した染色技術の一つである。江戸時代には、洒落を好む風潮を反映して、「三浦絞り」や「白影絞り」など素朴でありながらも技術や時間を要する絞り染め技法・意匠が大流行する。加えて、社会が安定し、身だしなみを楽しむ余裕ができ、絞り染め以外の染織技法も発展した。

絞り染めの代表格である有松絞りが隆盛を極めた江戸後期には、細かい括りを背景とした斬新で大胆な柄（「三浦絞り」を背景に一匹の大きな蛸を描き出した意匠）、技法自体が大柄な意匠の「巻取り蜘蛛絞り」等も流行した。

これらの有松絞りの独自技法を含む絞り染めは、長きに渡り活躍した浮世絵師・歌川国貞等の作品に多く描かれ、木綿地の日常品が多く、実物が残されていない江戸時代の絞り染めがどの様に用いられていたかを示す貴重な資料の役割を果たしている。約600点の歌川国貞の浮世絵に描かれた絞り染めの技法、意匠、色および使用用途を分析した。

一方、江戸と京都では、当時流行していた絞り染めの技法や生地の種類が異なっていたことが、「守貞謹稿」等の文献からも明らかである。例えば、浮世絵に多く描かれた「三浦絞り」や「鹿の子絞り」も、当時の絞り染めの二大産地であった有松では「三浦絞り」、京都では「鹿の子絞り」が多く生産されていたことが知られている。

本発表では、有松絞り研究で調査した浮世絵に描かれた江戸後期の絞り染めと、京都工芸織維大学工芸資料館に所蔵されている幕末から明治初期の絞り染め古裂帖にみられる京

都の絞り染めを文献の記述や聞き取り調査等も含めて比較し、江戸と京都で流行した絞り染めの技法、生地、染料等の相違を明らかにし、当時の絞り染めを考察する。

江戸の浮世絵

有松絞りは、美人画、役者絵のみならず、風景画にも多く描かれている。特に、鳴海宿を描いた浮世絵にはほぼ全てに有松絞りが描かれており、当時の名産品であったことが伺われる。

歌川国貞は、美人画、役者絵共に多くの作品を制作し、制作期間も約60年と長く、明治直前まで活躍した。本研究では、歌川国貞の浮世絵に描かれた、江戸の絞り染めの技法、意匠、用途の変遷を調査、分析した。

■ 青・壮年期 267点

1807年（文化4）より1828年（文政11）

国貞22～43才

■ 中年期 161点

1829年（文政12）より1851年（弘化5）

国貞44～66才

■ 老年期 403点

1852年（嘉永5）より1865年（元治1）

国貞67～80才

絞り染めが描かれている割合は、老年期になるにつれて増えており、半数以上の作品のどこかに絞り染めが描かれている。数カ所に描かれている作品も多く、絞り染めが多彩に用いられていたことがうかがい知れる。

絞り染め技法としては、鹿の子絞りが最も多く、青・壮年期では77.7%，中年期では65.5%，老年期では45.8%を占める。

老年期には、鹿の子絞りに代わり、三浦絞

りや、豆絞りなど、有松絞り特有の素朴な絞り染め技法の比率が増加する。絞り染めの用途が広がった結果とも言える。

京の古裂

現在、京都工芸繊維大学が大正元年（1912年）に平井宇一郎氏から購入した、江戸後期から明治中期までの生地を集めた古裂帖（大型見本帖）3冊、サンプル（生地）約300点の調査を行っている。

3冊の見本帖にはそれぞれ特徴がある。

- 「絞、板縫及友禅染標本帖」は、襦袢等に用いられたと思われる生地が多く、絞り染め、紅板縫めが多く集められている。
- 「友禅染標本帖－1」は、紬生地、麻生地を多く含む着物地が集められている。
- 「友禅染標本帖－2」は、「絞、板縫及友禅染標本帖」と同様に、多くの縮緬生地を集められているが、色も落ち着いたものが多く、柄も友禅によるものと考えられ、羽裏等の部分に用いられたのではないかと考えられる。

4倍、11.1倍の拡大撮影により、絞り染めおよび紅板縫め絞りの生地のほとんどが、「江戸縮緬」と言われる当時特有の薄い縮緬生地であったことが判明した。

「江戸縮緬」は、江戸時代の縮緬が名前の由来であるとされるが、実際には明治時代のものがほとんどで、江戸時代の現物が残されていないとも、江戸縮緬自体が明治時代になって多く作られたとも言われている。いずれにしても、江戸縮緬が多く作られていたのは、明治時代までで、大正時代に入ると作られなくなる。

江戸縮緬の薄く、細かい凹凸のある生地は、肌当たりが良く、着崩れしにくく、内着として最適の生地であったと推察される。

一方、11.1倍の拡大撮影で、京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵の江戸後期の絞り染め生地と昭和後期の絞り染め生地を比較すると、

糸の太さ、厚み等に歴然と相違が見られる。

江戸縮緬が生産されなくなった理由について、細い絹糸とその撚糸が織機の工業化に適していなかったという仮説を立てているが、布の重さによって価格が決まった（重い方が高級）時代が続いた事が要因で、技術的には工業化に左右されないとの意見もあり、今後調査、検証したい。

まとめ

歌川国貞の浮世絵を調査した結果、少なくとも江戸後期には多彩な技法の絞り染めが流通していたことが明らかとなった。

しかし、浮世絵では描かれている絞り染めの模様が小さく、細かい意匠までは読み取れず、素材については推察の域を出ない。

この様な状況下、今年度から丹後縮緬を本格的に調査、研究するようになった。

丹後縮緬は、約300年前に京都西陣より丹後にもたらされた縮緬技術が発端であるが、当時の縮緬生地は当地の禪定寺（ぜんじょうじ）に残されているだけである。現在の丹後は、日本で生産される着物用白生地の約7割を生産する日本一の縮緬生地産地であるが、明治時代の縮緬生地さえ、産地には残されていない。

現在の縮緬生地は、主に友禅等の多くの着物用白生地に用いられる耐久性、吸水性に優れた厚みのある高級生地で、絞り染めには適さないため、大正時代以降、絞りと縮緬の組み合わせが激減したと推察される。

この様に、絞り染めと縮緬の歴史的変遷から、その相互関係を明らかにすることができたと思量する。

染めに比べて意匠を論じにくい織りだが、縮緬生地だけでなく、模様織り、紬生地など、様々な織り技術が染め技術と同時に開発されており、染めと織りの相互関係を明らかにする研究を深めていきたい。